

教育プログラム・コースの概要

| | | | | | | | |
|--|--|------|------|------|------|-------|---|
| 大学名等 | 慶應義塾大学大学院医学研究科 | | | | | | |
| 教育プログラム・コース名 | 臨床医学物理研修研究コース(正規課程) | | | | | | |
| 対象職種・分野 | 医学研究科博士課程大学院生 | | | | | | |
| 修業年限(期間) | 4年 | | | | | | |
| 養成すべき人材像 | 近年の放射線治療は、時代の流れと共に、ハードウェア・ソフトウェアの技術進歩が止まらない。そのため、その時代の変化に適応して進化していきける変進力を必要としている。医学物理士は、医学物理の専門家として放射線治療に欠かせない重要な役割を担うため、早期に実務に参加することが期待されている。本コースで養成すべき人材像は、臨床医学に直結した自然科学と工学技術に対する深い造詣を持ち、無から有を創り出す開発・改革の能力を有する人材である。そして、協調性を持ってチーム医療に貢献し、がん患者に最も最適で、最も効果的な放射線治療を提案できる高度専門医療従事者の養成を目指す。 | | | | | | |
| 修了要件・履修方法 | 医療科学系専攻の主科目21単位以上に加え、以下の【履修科目等】に記載のすべての科目を副科目として履修し、単位を修得すること。履修内容審査および学位審査に合格すること。 | | | | | | |
| 履修科目等 | 医療科学系専攻の主科目21単位以上に加え、以下のすべての科目を副科目として履修し、単位を修得すること。履修内容審査および学位審査に合格すること。 <医療科学系専攻主科目> 生命倫理学(1単位)、臨床疫学または基礎疫学(2単位)、医学統計学または基礎生物統計学Ⅰ・Ⅱ(2単位)、所属分野科目(特論・演習・実習)(計16単位) <副科目> 基礎腫瘍学(2単位)、先端ゲノム医学(1単位)、緩和医療学(2単位)、臨床腫瘍学(2単位)、化学療法学(2単位)、臨床研究方法論(1単位) | | | | | | |
| がんに関する専門資格との連携 | 放射線治療専門医の修練期間(日本医学放射線学会・日本放射線腫瘍学会) | | | | | | |
| 教育内容の特色等(新規性・独創性等) | 1年時には、がん医療の基盤的知識及び幅広いがん治療に関する講義を実施する。2-3年時には、がん治療全体を俯瞰する視点を身に付けるために、がんに関連する複数の診療科やがん専門施設で多様ながんに対する化学療法、分子標的療法、低侵襲外科、緩和医療・リハビリテーションなどを経験するための臨床研修を受けることが可能である(希望制)。4年次には、医学物理の専門家として、放射線治療を受けるがん患者の治療計画を放射線治療医と協力して立案・実施する訓練を受け、専門的な知識・技術を磨く。また、4年間かけて放射線治療の臨床現場を研修し、放射線治療医や診療放射線技師、看護師など、他職種との議論やカンファレンス、講義などを通じて放射線腫瘍学、放射線技術学に対する理解も深めていく。加えて、基礎研究・臨床研究・トランスレーショナル研究の進め方について学習し、がんに関連する研究に従事する。 | | | | | | |
| 指導体制 | 指導教授：茂松 直之(医学部放射線科学教室(治療)教授) 担当教官：深田 淳一(医学部放射線科学教室(治療)専任講師) 担当教官：花田 剛士(医学部放射線科学教室(治療)専任講師) | | | | | | |
| 修了者の進路・キャリアパス | ・医学物理士 ・診療放射線技師 ・企業人(放射線治療関連企業) | | | | | | |
| 受入開始時期 | 令和6年4月 | | | | | | |
| 受入目標人数 ※当該年度に「新たに」入学する人数を記載。 ※新規に設置したコースに限る。 | R5年度 | R6年度 | R7年度 | R8年度 | R9年度 | R10年度 | 計 |
| | 0 | 1 | 1 | 2 | 2 | 2 | 8 |
| 受入目標人数設定の考え方・根拠 | 過去の大学院志願者数及び入学ニーズ調査から毎年度1-2人の志願者が見込まれるため、受入れ目標人数を8人と設定。 | | | | | | |